

演題7. 口腔底に発生した lymphoepithelial cyst の一症例

○斎藤 善広, 大屋 高德, 藤岡 幸雄,
武田 泰典*

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座
岩手医科大学歯学部口腔病理学講座*

Lymphoepithelial cyst は、1mm~10mm程度の膨隆として口腔内に無症候性に発症し黄白色ないしクリーム状の内容液を含む嚢胞とされており、その報告数は内外で136例と少数である。今回我々は、舌下面に生じた本嚢胞の1例を経験したので報告した。

症例：患者は62歳、男性で、既往歴、家族歴に特別なことは無い。当科臨床診断下顎歯肉癌にて手術を行った際、病理組織的検索により本嚢胞の併発を認めた。その組織像は、口腔粘膜上皮下にあり錯角化を伴った重層扁平上皮を嚢胞壁として、その周囲に、リンパ浸潤ないし胚中心をもったリンパ組織を有し、その内腔には剝離上皮の存在を認め、lymphoepithelial cyst の典型像を示した。さらに一部嚢胞壁には、多列線毛上皮やオンコサイトの存在も確認された。嚢胞上皮の基底層は比較的平坦であり、上皮脚の形成はみられず、リンパ組織を構成する細胞は、おおむね小型のリンパ球であり、上皮直下に形質細胞が比較的多く認められた。

その発生については2つの説がある。ひとつは、Knapp が示した口腔扁桃 (oral tonsil) の腺窩 (crypt) の閉鎖により発生する偽嚢胞という考え方で、Guinta と Cataldo、さらに Toto らは口腔との連続性を示すことによりその考え方を支持した。もうひとつは、Bhasker らによって示された、胎生期口腔粘膜に存在するリンパ組織へ腺上皮が迷入することによって発生するという考え方で、Vickers はハムスターの顎下リンパ節へ頬粘膜を移植し、嚢胞を発生させることによりこれを指示した。

本例における、発生機序を明らかにすることはできなかった。

今回、この概要について多少の文献的考察を加え報告するとともに、先人の症例に加えた。

演題8. 下顎骨に発生した massive osteolysis の1症例

○柴田 貞彦, 大屋 高德, 藤岡 幸雄,
武田 泰典*, 鈴木 鍾美*

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座
岩手医科大学歯学部口腔病理学講座*

Massive osteolysis は特発的に無症状のうちに骨の融解が進む原因不明の稀な疾患であり、全身のあらゆる骨に単発性あるいは多発性に発現するとされている。一方、下顎骨においても1933年に Thoma が初めて報告して以来、13例の報告をみるにすぎない。今回、私共は下顎骨に発生した massive osteolysis の一例を経験したのでその概要について報告した。

症例は、左側上行枝部の陥凹を主訴に来院した46歳の女性で、特に自覚症状は認められなかった。X線상では、下顎臼歯骨体部、顎角部、さらには上行枝部、関節突起部、筋突起部にかけての広範囲に骨の吸収を認めた。組織学的には、患部顎骨は不規則な配列を呈する膠原線維を主体とした線維性結合組織にほぼ置換されており、一部には血管成分の目立つ部分も存在した。また、破骨細胞は目立なかった。本例に対し、私共は顎切除後、自家腸骨移植、並びに A-O Reconstruction plate による再建を行った。現在のところ経過良好であり、引きつづき経過観察したい。

演題9. コンポジットレジンとの隣接面研磨に関する基礎的研究

○中嶋 和郎, 小原 雅彦, 久保田 稔

岩手医科大学歯学部保存学第一講座

コンポジットレジンのストリップスによる隣接面研磨に関する基礎的実験を行った。

まず、GC, 3M, 井上製ストリップス3社11種の表面粗さを測定した後、3M製のストリップスにより研削回数および研削荷重を変化させた際の研削効率を、研削が困難な従来型コンポジットレジンのクリアフィルFIIを用いて測定した。次に400g研削荷重を臨床条件とし、この荷重下における表面粗さを

従来型, サブミクロン, 超微粒子コンポジットレジン
の3種に対し測定し, 以下の結論を得た。

1. GC製ストリップスの表面粗さは約10~2 μm へと段階的に変化していたが, 他の2社製品は最も粗いものと次の間に5 μm 差が認められた。
2. GCの600番および3M, 井上の400番より荒いものは研削効果が大きい。しかしそれ以外は研削効果が小さく, 全んど削除には働かない。
3. 最も荒いストリップスにおいては研削回数荷重に伴い研削量は増加したが, より細かいものでは研削回数の増加はある程度研削量を増加させるものの, 荷重の増加は逆の結果を示すものもあった。
4. ストリップスの荒いものから細かいものへ段階的に研削を行えば, レジン・ストリップスの種類に関係なく最終的に中心線平均粗さ0.5 μm 以下の表面状態を得ることができた。
5. 従来型レジンに比べサブミクロンおよびMFRは容易に平滑な面を得ることができた。
6. 研削方向による表面粗さの差は, 研削回数の増加に伴い減少し, ほぼ同程度になる。
7. 細かいストリップスにおいては, ほぼ10回の研削により最終到達表面粗さに達し, それ以上の研削回数の増加はほとんど表面粗さに影響しない。

演題10. 下顎舌側歯槽粘膜部に遊離歯肉移植を行った1症例について

○中林 良行, 松丸健三郎, 菅原 教修,
森川 伸彦, 石川 和史, 清水 隆公,
上野 和之

岩手医科大学歯学部保存学第二講座

遊離歯肉移植術は, 最近, 一般的に行われるようになってきている方法であり, これまでにも, 頬側歯槽粘膜部に行った症例の報告は, 多数ある。しかしながら, 舌側歯槽粘膜部に行った症例の報告は, 海外でも非常に少なく, 本邦では殆どみあたらない。今回, 我々は, [34部の舌側角化歯肉の幅が殆どなく, ブラークコントロール指導後の歯ブラシや歯間ブラシ使用時, および, 頻回の義歯調整にも拘らず, 義歯使用時に, 褥瘡性潰瘍や, 擦過傷を[34部の歯槽粘膜部に, しばしば形成し, 疼痛を訴えた35歳の女性患者に対して, 同部に遊離歯肉移植術を施行, その後, 現在まで4年間良好にメイン

テナンスしているので報告した。患者は, 35歳女性で昭和52年5月26日に下顎前歯部の動揺が気になるという事を主訴として, 近医の紹介により本学に来院し, その後, 仕事の都合により, 通院を中止したが, 昭和55年11月11日再び来院し, 第二保存科に紹介され, 再び, 初期治療を行った。しばしば, [34部の頬側歯肉に歯ブラシにより擦過傷を形成したが, 対症療法により経過観察し, 咀嚼障害を訴えていた下顎臼歯部に対して, 補綴科にて治療用義歯を製作した。しかし, 頻回の義歯調整にも拘らず, 義歯使用時に, しばしば褥瘡性潰瘍, 義歯着脱時に擦過傷を[34部の歯肉から歯槽粘膜部にかけて繰り返し形成し, 同部の機能的な角化歯肉の幅が狭く, 厚さも薄いため, 通法により口蓋の咀嚼粘膜を用いて遊離歯肉移植術を[34部に行った。その後, [34部の歯冠修復を行い, 全顎におよぶ補綴処置を行ったが, 同部の歯周組織は現在まで良好にメンテナンスされている。このように, 高度の歯周疾患罹患歯の見逃されやすい舌側の歯槽粘膜部に, 歯周補綴後に擦過傷などの, なんらかの症状が現われている場合には, 遊離歯肉移植術は, 良好なメンテナンスにとって重要な役割を担うものと思われる。

演題11. 雌マウス顎下腺細胞質ならびに核画分アンドロゲン・レセプターのテストステロン投与の効果

○客本 斉子, 黒川 理樹, 根本 孝幸,
根本 優子, 馬場 利恵, 吉田 元彦,
佐藤 政直, 太田 稔

岩手医科大学歯学部口腔生化学講座

【緒言】マウス顎下腺はアンドロゲン依存性臓器でありアンドロゲンレセプター(AR)が存在する。ARの細胞内局在性には性差があり雄で約74%が核にみいだされる一方雌では約94%が細胞質にみいだされる。今回は雌マウスに testosterone を投与し, *in vitro* で細胞質ならびに核中にみいだされる AR 量を経時的に測定し, その変動に関して検討を行った。

【方法】雌雄 ddY マウスは testosterone propionate (TP) を皮下投与後経時的に顎下腺を摘出し, Tris-HCl 緩衝液でホモゲナイズ後, 105,000×g で遠心しその上清を細胞質 AR 画分として, 沈澱は洗浄後 5mM pyridoxal 5'-phosphate で抽出し核